

第三百五十六 琴一曲

新しき品はアスピーケゼリーの鳥料理、それに續いてシャンパンのポンチも出でたり、アスペラガスヘクリームソースをかけたるものも出でたり、クリームソースとは白ソースにフレッツシクリームを混ぜたるもの、此に於て衆客は中川に聞きたるクリームの眞味を賞しぬ、野菜料理の次が七面鳥のロースなり、製法は外の肉の上等ロースに同じけれども前胃に豚と犢の碎き肉を詰めたるは一段の味を添へぬ、續いて出でたるサラダロアイヤーは林檎とセロリーの細かく切りたるを上等のマイナイスソースにて和へたるもの、アイスクリームはパインナプルの味を含み、レデーケーキは先に衆客が目撃せし所、外にデザートの干菓子あり林檎に柿の果物あり、珈琲はモカの上等を用ゐ、一品一物皆な是れ卓上の珍ならざるは無し、食事了りて會衆が暫く休息せし後主人の廣海子爵は當日の餘興にとて姫君の玉江嬢に琴一曲を弾ぜしめたり、妙音清調會衆は皆な天國に遊びし心地せしが主人公も亦た多年の嗜みとて觀世流の謠曲羽衣を謠ひ出しぬ、客の中には覺えず聲に和して手拍子を取るもあり、子爵は元來聲自慢、一楊一抑法に適ひて四壁に透徹する計りなるが漁夫と天人の問答に至りて一段と力を籠め「此の衣を返しなば舞曲をふさで其儘に天にや上り給ふべき」「イヤ疑ひは人間に在り、天に偽り無きものを」と謠ひ半ばに八々と聲を停め「諸君、我輩は平生羽衣の曲を愛するのは此の一句に在りませう、イヤ疑ひは人間に在り、天に偽り無きものをと、此句程高遠雄大にして光風霽月の如きものが滅多にありませうか、日本の文學は初置き世界中の美文を蒐めても此上に出づる句はありますまい、是れこそ實に世界的の美文で天下萬世に誇るべきものです、人の心は誰も斯くこそあり度けれ、大原君が海外へ赴いて外國人に接する時は常に此句を以て日本人の精神となし給へ、イヤ疑ひは人に在り我れに偽り無きもの」と其の心を以て世に立たば何人も間違ひはありません、食道樂會の精神も其處にあります、衛生法に適たる食物を以て身體を養へば心も自ら高遠雄大になりませう、食物は獨り身を養ふ計りで無く、心も亦た

食物で養はれます」と興に乗じて轉た感慨を説く、座中の一客感歎し「いかにも主人公のお説の通り、我々の催したる食道樂會は單に人の口腹を悦ばしめる為めでは無く、之に據つて人の腦髓精神をも高潔正大になさしめる會合です、食物が人の體中に消化吸収せられなかければ人の腦隨も養分を取る事が出来ません、然るに此の消化吸収と云ふ事が一問題で、同じ様に料理した食物を喫しても人の體質や境遇によつて大に吸収消化の度を異にしませうが平生何ういふ風に心掛けたら宜いでせうか、即ち食道樂會の大眼目とする事がありませう、是れは食物問題の根本ですから是非一つ中川君の御説明を伺ひ度い」と復たしても中川の長廣舌を促す、

第三百五十七 程と加減

此に至りて中川は再び例の長廣舌を揮ひ始めたり「そのお尋ねが無くとも私は一度諸君に食道樂の本領即ち食物問題の大眼目となるべき心得方をお話し申し度いと存じて居ました、食物の事を一々別々に説明しては際限もありませんが只一つ何の場合にも應用の出来る心得方は程と加減を知ると云ふ事です、大食に過ぎてもならず、少食に過ぎてもならず、肉食に偏してもならず、菜食に偏してもならず、何事にも一番大切なのが程と加減を悟るので、是れはコンモンセンス即ち常識のある人が注意して物を考へれば誰にでも自然と解ります、人の心に此の二三日腹工合が悪いが少し肉類を食へ過ぎた様に思はれるとか或は食物に不都合は無いけれども運動に不足したらしいとか大概は察し得られます、もしや自分で察し得られんでも外の人が平生程と加減に注意して居るとその過不及も自然と解るもので、妻君が家の旦那は甘い物計り此頃澤山召上るけれどもチト甘味が過ぎはしないかと氣の付く時は必ず良人が一時性の糖尿病を起す時です、何ほ肉類が良いと云つても爾んなに澤山召上てはお毒になりませんかと外の人に忠告される時は必ず食物の偏頗を招いて居るのです、食物は消化吸収の良いものに限ると云つて三度々々柔い物計り食べて居ると胃の機械的作用が弱つて來てお香物とお茶漬けが欲しくなる、其の時は必らずお香物やお茶漬けの分子に缺乏して居るのです、お茶漬けサラ／＼と一口に云

ふ位で胃中に粘着性の多い時はお茶漬けでサラ／＼と胃を洗ひますから大層心持も良し、消化吸収がよくなる事もあります、と云つて坐職の人や脳を使ふ人が毎日お茶漬飯を食べると運動不足の爲めに不消化を起しますから何でも人の境遇によつてその程と加減を違へなければなりません、つまり自分の心で自分の身に適した程と加減を考へるのが一番確かです、それから又何程食物計り吟味しても戸外運動が不足したら消化吸収の力がありません、是れは諸君もよく御承知でせうけれどもその運動にも程と加減があつて食後直ちに激烈な運動をすると非常に胃を害します、爾う云ふ時には腹が突張つて痛くなりますから自分でも直ぐに分ります、或は運動に過ぎて心身を疲労させると消化吸収の力は非常に衰えます、昔しの早飛脚が着いた時に先づお粥を與へなければならん、急に御飯を食べさせると死ぬと言傳へたのは疲勞した人に不消化物を與へるなど云つた戒めです、運動の不足は最も人の身體に禁物ですが運動の過度も矢張り禁物で、運動にも程と加減があります、人の身體に食物の良く消化吸収されるのは何事も程と加減に合つた時です、衛生上の原則や生理上の原則を誰でも一々記憶する譯になりますまいから食物問題に對しては程と加減が一番大切だと心得ていらつしやい、爾うすれば自然と衛生法に適ひます」と最も解り易き戒めなり、聽く人皆な感心し「成程お説の通り程と加減を知るのが食物問題の大眼目に違ひありません、然し是れは食物問題のみならず天下の事何者かその戒めに乖きませうぞ、私は今のお言葉を百事に應用して是れから生涯守りませう」と深く中川の言に服するものあり、中川が斯くまで人に重んぜらるゝを見て最前の若紳士忽ち癢に触りけん「オイ中川君」と何か挑む様な口氣にて呼かけたり、

第三百五十八 心の愉快

若紳士は何かにつけて中川を突込まんと「中川君、君の話は大謂上手だが所層る八方美人主義で一向要領を得ない、程や加減が誰にでも悟り得られ、ば君のお談義を聞くに及ばんがそれを悟るのが六か敷いから困難する、それよりも萬人が萬人直ぐ行へる様な心得を聞き度子、誰にでも同じ様に實行の出来る訓言があるならばその方を伺い度

い子、エ、中川君、モ一層實際的の心得は無いか子」と妙に人を嘲弄する様な口氣あり、中川は少しも驚かず「アハ、程や加減では君に解らんか子、僕はコンモンセンス即ち常識のある人なら大概解ると思つたが或は君の様に解らん人が出来るかも知れない、それならば御注文通り萬人が萬人直に行へる心得を言つて聞かせやう、それは外でも無い、消化吸収の力は最も多く人の精神作用に支配せられるから人は何時でも我が心を愉快に持つて居なければならんと云ふ事だ、何程腹が減つて居ても食事に對する時我が心に外の事の心配があつては食物の味も解らず、食べた物が消化しない、假令ひ心配で無くとも食物に對する時外の事を考て居てはならん、心を外へ向けるとそれだけ消化力を失ふ譯だ、よく昔の人は食物に頓着しないと云ふ事を英雄豪傑の外見にした、食物の味は何うであらうとも爾んな小さな事を彼は言はん、自分の頭にはモット大きな問題があるぞと言はぬ計りに食物問題を輕蔑したものだ、成程それが英雄豪傑かも知れんが食物の味が解らん様な英傑は自分の身を重んずる事を知らんから決して大事業を成し遂げられない、是れは大きな間違ひだらうと思ふ子、食物に對した時は外の事を考へないで食物の味を償翫する事の出来る人が其心に綽々たる餘裕もあるので眞の英雄豪傑と言ふべきだ、心配が胸に悶へて食物の味が解らん様な豪傑は一向難有くない、今の人達にも食物に無頓着な事を自慢する者があるけれども僕には一向譯が分らんよ、誰でも食物に對する時は外の方へ心向けずに食物の味を償翫しなければならん、それが消化吸収の力を養ふべき第一の根本だ子、尤も其事は食物に向つた時計りで無い、人は平生愉快の心を持つて居る程胃腸の働きが盛になる、それに反して一年中心配計りして居るとそれが為めに胃腸の働きが弱くなる、或る醫者が我國のお嫁さんの病氣は大概胃腸病に原因する、それはお嫁さんの境遇が餘計な心配を忍ぶからだらうと云つたが一理ある言葉だと思ふ、我國の人は平生心を不愉快に持つ癖がある、それも一つは文學の弊で我國の文學は病的文學と稱すべきものだ、何でも世中を悲觀的に觀察して愚痴や不平計かり並べて居る、殊に風流に關する程一層の悲觀的になる、月を觀て悲しむ、秋に逢つて悲しむ、虫の聲を聽いて悲しむ、何を見ても只無闇に悲しむのが風流の癖だ、あれでは胃と腸が嘔惡くなるだらう、今の文學者の言論文章を讀んでも多くは不平怨嗟の聲だ、ヒステリー患者のよまひ言に似

て居て不平や怨嗟の聲を發するのが文學者の本領と心得て居る、御當人は仕方が無いとしても社會の人がそれを讀んでその不平や悲みに傳染するから困る、傳染の極端な華嚴は瀧へ飛込と言ふ事になるから愈よ困る、爾う云ふ有様では無病の一までが段々消化吸収の力を弱くする様なものだ、是れは先づ今の病的文學を改良しなければならんが世を文明に進めんと欲すれば誰でも人は平生愉快の心を持つて居なければならん、殊に食事の時は愉快の心を以て食物を味はねばならん、是れが食物に關して誰にでも應用の出来る心得だ」と再度の説明に座客は愈よ感服する、若紳士獨り苦い顔をして「それは尚ほ無理だ」と叫び出したり、

第三百五十九 我が覺悟

若紳士は中川を説破せんとして一生懸命なり「中川君、人の心の愉快と不愉快とは其境遇に在るさ、不愉快の境遇に在る人へ心を愉快に持てと云つても無理でないか」中川「イヤ爾うで無い、人の心の愉快と不愉快とはその境遇よりも寧ろその覺悟に在る、勿論境遇に幸不幸の區別がないとは云はんが大概な人はその覺悟によつて心を愉快に持てると思ふ、先づ手近い話しが人は誰でも自分の職業を神聖として樂しまねばならん、職業に高下貴賤の別は無い、勞働力役と雖も神聖なる職業だ、天下の人が皆な各々自分の職業を樂しんで熱心に勉強したならば毎日其心も愉快で充たされるだらう、然るに今の世の人は自分の業務をさへ愉快に實行しない者もある、それが第一に人の心を愉快と不愉快の別れる處だ、僕が自分の事を例に出すのもおこがましいが僕なぞは文筆を以て社會を感化するのが何よりの樂みだ子、實に人生無上の愉快だ子、自分の業務を愉快に樂しんで居るから口廣い事を言ふ様だけれども一年三百六十日一日として我が業務を怠つた事が無い、鴉の鳴かぬ日はあつても僕が業務を休んだ日は一度も無い、それも一年や二年の事で無い、君等を始め世間の人が皆知つて居る通り僕が文筆に従事してより永年の間に自分の怠りで業務を休んだ事は未だ嘗て一日も無い、休むどころか愉快に驅られて毎日業務以外の仕事までをする、勿論是れは人の道として當然の事だ、日に三度の食事をなすと同様に

我が業務を盡さねばならんのが人たるの務めだ、然るに世間には三度の食事を満足に食べて居ながら自分の業務を満足に盡さない人もある、それよりも甚しいのは自分の務めを満足に盡さないで他人の事を彼是批評したり社會に向つて不平を唱へたりする人もある、それはチト得手勝手な不平であるまいか、自分が業務を盡さなければ社會から不平を言れても仕方が無い、それを自分の方から社會に向て不平を言ふとは實に亂暴千萬だ子、自分の業務をさへ盡し得られない人は他人の事を批評したり社會に不平を唱たりする資格が無いのだ、文明の世には言論よりも實行を貴ばねばならん、先づ自分から人たるの務を實行して置て他人の事をも言ねばならん、實行の人は常に愉快の心を持って居られるが不實行の人は多く不平や怨嗟の聲を發する様だ子、勿論今の世に誰も不平を言ふなどは申さん、或る場合には不平の力で社會を改良する事もあらうけれども無用の不平は愚痴に陥る、言はないでも宜い事へ一々不平を言ふのは愚痴だ、愚痴ほど人の心を不愉快にして消化吸収の力を害する者は無い、僕はドウも今の人に平生愚痴の心が多過ぎると思ふ、譬へば海に臨んでヤレ波が高いのヤレ風が荒いのと歎き悲むのは愚痴だ、何程愚痴を漏しても愚痴の聲で波や風は鎮まらな、それよりも此の波を凌いで大海を渡るには千噸の船を造らねばならん、イヤ千噸ではまだ小さい、一萬噸二萬噸の船を造らうと斯う云ふ風に心掛けたら遂には波や風を何とも思はなくなる、人もその通り我が體力心力の寡い時は丁度船の噸數が寡いと同様で社會の風波を凌ぐのに困難する、我が体力と心力とを増加して一萬噸二萬噸の大きさにすれば激浪怒濤の中を平氣で乗り廻はせる、世間には往々我が噸數の過少なるを顧みないで徒らに風浪の高きを怨むと云ふ人が無いとも限らん、厭世主義や悲觀主義は爾云ふ事からも起るのであるまいか、それが即ち愚痴と云ふものだ、兎に角人は誰でも其の體力と心力とを増加して一萬噸にも二萬噸にもする様な心掛けで居なければならん、體力と心力とは何を以て増加する、即ち平生の食物に在りだ、左ればこそ人は一日も僕の主張する食道樂を忘れてはならんアハ、と何處迄も我田へ水を引く、我紳士も最早争ふ力無し、獨り愉快に堪えざるは中川に心を寄する玉江嬢、

第三百六十 新結納

此夜食道樂會の會衆を散じて後小山夫婦に大原中川の兄弟は跡片附の手傳ひにとて残りしが小山は折を見て中川を閑室へ招き「中川君ちよいと少し相談がある、外でも無い廣海子爵は今日を吉日として萬事の相談を遂げて置き度と云はれるが、第一は兼て僕等の志願たる雜誌發行の一件だ、子爵が何程でも資本を出すから世界人道の為來春を期して一大雜誌を起したら何うだとの事だ、無論君も同意だらう子」中川「勿論さ、僕は一日も早く世人として幸福愉快なる心にならしめん事を望む子、今の様な有様では折角食物衛生を天下に勧ても厭世觀や悲哀觀の流行する為め人の元氣沮喪して食物を消化吸収するの力無く、其自體中毒で腦を刺撃するから人の神經が過敏症の病的となつて不平怨嗟嫉妬愚痴爾んな事計り言つて日を送る有様だ、僕は人道雜誌發行の一日も忽せにすべからざるを思ふ子」小山「大原君にも海外から家庭教育上の通信をして貰へば好都合さ、其からモー一つはお登和さんを三年間計り洋行させ度い、それも子爵が入費を出すから國家の為に洋行させては何うだと云はれる、外の事情は問ふに及ばん、子爵がお登和さんに洋行を依頼するから御本人さへ承諾したら君は異存を言はれまいと云ふ譯だ」中川「ウム、それは當人の心は任せても宜いが急の事では少し困る」小山「イヤ事が決してさへ居ればそれで宜い、モー一つは結婚問題、即ち是れは僕の方から兼ねて子爵へ申出して承諾を得て居る事だが、あの玉江嬢を君に貰つて來れ給へと云ふのだ、食道樂會を兼ねて婿を選定するのも今日の一度で澤山だそうだ、是非一つ君に貰つて呉れると先方の望みだが何うだ子」中川「宜しい、それも異存は無いが然し僕は兼ねて主張する一事件がある、即ち結婚前には双方の男女が信認すべき醫士に身體検査をして貰つてその検査證を交換するのだ、今の世にはその慣例が無いから不幸にして病的の人と結婚する危険がある、肺病は勿論だが最も社會に害毒を流すものは花柳病でそれが為めに病的の子孫を生ずるのは一家の大不幸だ、其外に恐るべき遺傳病と傳染病は澤山ある、僕は世人が結納を取交はせる代りに身體検査證を取かはせる事の最大急務なる事を信する子、僕も検査證を差上げるから玉江嬢からも検査證を貰ひ度い、然しそれで事は極まつても今は約束だけに止めて結婚は先つ二三年の後だ、何とな

れば僕の方にも未だ人の良人となり親となるべき準備が無い、一の家庭を作るにはそれだけの資本を蓄へなければならん、借金をして女房を貰ふ様な事では迎も家庭の幸福を受けられない、玉江嬢の方もまだ人の妻となるには早過ぎる、妻となれば忽ち親となるべき覺悟が無ければならん、妻となつて家政を調理し、親となつて子女を育するにはモ―二三年の修業を要する、僕の云ふ事は是れだけだ、子爵に宜敷取次いで呉れ給へ」と中川の返答竹を割りたる如し、小山は其事を子爵に傳へ席を改めて尚ほ將來の事を談じぬ、越えて數日大原は海外へ出發したり、中川と玉江嬢は樂しき月日の下に在り、是れより世間に流行するは衛生上より研究したる和洋料理の食道樂、

増補註譯 食道樂（冬の巻）終